日本ピアノホールディング社長
中森隆利さん

富岡製糸とピアノ縁深く

世界文化遺産の富岡製糸場が開業した1872（明治５）年、建設を指導したフランス人技師、ポール・ブリュナと妻のエミリが、国内では当時珍しかったピアノを場内に持ち込んだとされる。以後、本県は国内有数のピアノが盛んな地域となった。ピアノプラザ群馬を運営する日本ピアノホールディング（高崎市）の中森隆利社長（77）は「本県初とみられるピアノが製糸場に置かれてから150年。改めて群馬とピアノのつながりの深さを知ってほしい」と話す。

ブリュナとピアニストだったエミリは同年、２台のピアノを製糸場のブリュナ館に設置したといわれている。中森さんは「1900年に国産のピアノが誕生するずっと前に、西洋の最先端の文化が本県に持ち込まれていた」と強調。「エミリは日常的にピアノを弾き、製糸場で働いていた人々もその音色を聴いていただろう」と想像する。

「ピアノは家庭だけでなく、社会の財産としても楽しんでほしい」と話す中森さん

この２台は夫妻が1876年に帰国する際に横浜で競売にかけられ、現在は行方が分かっていないという。だが、その後、本県ではピアノ文化が深く根付いていった。

総務省の調査によると、本県の1000世帯当たりのピアノ所有台数は高水準で、電子ピアノを調査対象に加えた2014年以前では1999年が全国７位、2004年５位、09年１位となるなど、ピアノが県民にとって身近な存在であることが分かる。

中森さんは「ピアノを置ける住宅環境が整っていることや、親が子どもの習い事に熱心であることが理由ではないか」と推察する。

同社は前橋駅や高崎駅など、県内各所にストリートピアノを提供。訪れた人に自由に弾いてもらうほか、定期的にコンサートを実施している。中森さんは「ピアノはインフラ。教育の一環で使われるだけでなく、ピアノがあれば人が集まり、地域振興にも貢献できる」と力を込める。

開かれた場所で生活の一部としてピアノや音楽に触れてもらおうと、前橋市の前橋テルサで03年から続くロビーコンサートにも企画、運営などで協力する。「本県とピアノのつながりは、県民にあまり認識されていない。まずは身近にある音楽を実感してほしい」と訴える。（村上真代）

2022.02.15.上毛新聞 文化面